

この報告書は、Child AFRICAが活動の根幹に掲げる子どもの教育支援において、「子どもにやさしい学校」の現場を見ることで活動の方向を検討するために、2009年2月に事務局長長島美紀が東ティモールを訪問した視察レポートです。Child Africaは2010年5月、mufefの設立に伴い、その事業をmufefに引き継がれています（数字データは掲載当時のものです）。

世界で一番若い国、東ティモール



どこまでも続く高い山。山々と直接つながるかのように、青い海が取り囲む国、東ティモール。小スンダ列島の東端、ティモール島（Timor）の東半分を占める国です。テトゥン語で東ティモールを意味する「ティモール・ロロサエ」の「ロロサエ」は、「日が昇る場所」を意味しています。サンゴ礁の海では、時折ウミガメも見ることができるそうです。

首都圏とほぼ同じ広さの国土で生活する人口は約106万人。首都のディリで暮らすほかに、山間部で生活する人々もいます。昔の生活の名残で、見晴らしがよく、攻撃を受けにくい場所で生活しているのだ、と話してくれる人もいました。

農村部では水牛がのんびり水につかっているのが見えます。東ティモールでは水牛は、農作業に欠かせません。また、荷物運びをする馬や、食料としてのブタやニワトリ、ウシもあちこちで見ることができます。山間の集落では、びっくりするような急な斜面を楽々と登っていくヤギに何度も遭遇しました。露地では、アボガドやフルーツ、採れたての野菜が売られています。マーケットでは野菜だけではなく、生活雑貨や、インドネシアなどから輸入された古着も売られて、活気にあふれています。

飛行機からみる東ティモールの首都ディリは、せり出した山と海のすき間にあるように見えます。しかし、この一見穏やかな風景が続くかに見え

る東ティモールも、空港を出てディリ市内に入ると、異なる景色を見せました。

道を行き交う車の多くに「UN（国連）」の文字が見えます。国連東ティモール統合ミッション（UNMIT:United Nations Integrated Mission in Timor-Leste）は、東ティモール警察が再建されるまで、治安維持を担っているため、「UN Police」の文字がついた車がディリ市内で多く見かけられます。今回訪問した教育支援でも、政府はユニセフと協力しながら教育政策を進めています。こうした景色は、東ティモールの国が、独立してまだ若いことを強く実感させるものでした。

東ティモールというと、「世界で一番若い国」、という言葉が浮かびます。2002年5月20日に独立した東ティモールは、21世紀に入って誕生した、初めての国です。



独立までの道のり

東ティモールの「今」を知るには、その長い苦難の歴史を知る必要があります。16世紀にポルトガル人によって「発見」されたティモール島は植民地化され、19世紀に西ティモールがオランダ領として割譲されるまで、ティモール島はポルトガル植民地政府による搾取が続きました。東ティモールの産品として有名なコーヒーは、この植民地時代にポルトガル人によってもたらされました。一方で、ポルトガル支配と同時にドミニコ会の布教活動が行われたことから、現在も国民の多くはカトリック教徒でもあります。島のあちこちでは、山の上にキリスト像や十字架などが設置されているのを見ることができます。

オランダ進出後、東西に分割されたティモール島は、第二次世界大戦時は日本軍に占領されました。その後、日本の敗戦によってオーストラリア軍の進駐を経てポルトガルの支配が復活、1949年にインドネシアの一部として西ティモールの独立が確定した後も、ポルトガルの東ティモール支配は続きました。

1974年にポルトガルで保守独裁体制が崩壊すると、フレティリン（東ティモール独立革命戦線）を中心に、独立運動が加速しました。この動きに対し、東ティモールの領有権を主張するインドネシアのスハルト政権は、西ティモールから侵攻を開始、1976年には併合宣言を行います。

インドネシアの占領下で、20万人に上る人が虐殺や飢餓などが原因で死亡したとされています。1991年には占領に抗議

するデモに対してインドネシア軍が発砲、400人近くが死亡した「サンタクルズ事件」も発生しています。

1998年にスハルト政権が崩壊すると、国際世論の高まりも背景に、後任のハビビ大統領は東ティモールに関する特別自治権の付与を問う住民投票（レファレンダム）を実施しました。しかし国連の監視下で行われた住民投票の結果にもかかわらず、インドネシア治安当局はインドネシア併合維持派の民兵を使って破壊と虐殺を行います。この暴動の間に、難民が多数発生し、西ティモールに強制的に連れ去られたり、民兵に強制的に加入された人、性的暴行を受けた少女や女性も多数存在します。また、警察や軍に捕まった女性が電気ショックや性的暴行を受けたことは、強い非難を受けました。

暴動は多国籍軍によって鎮圧された後、国連東ティモール暫定行政機構（UNTAET）によって、2002年の独立まで暫定的に統治されることになりました。東ティモールは2002年に独立しましたが、政情不安は続いており、国連東ティモール統合ミッション（UNMIT）が現在も活動を続けています。東ティモールの治安が安定しない理由としては、東部住民と西部住民の軋轢や、若者の失業率の高さ、そして貧困の問題が挙げられます。



東ティモールの厳しい状況

国連開発計画(UNDP)が算定する、その国の人の生活状況や発展度合いを見る人間開発指数(HDI)によると、東ティモールは179か国中158位。HDIの達成が最も低い国の一つです(ちなみに日本は8位です)。**【表1】**

東ティモールの厳しい状況は、とりわけ個々の貧困に関わる指標をみる

【表1】 人間開発指標：成人識字率、総就学率、一人当たりのGDP、平均寿命から算出。UNDPホームページより

HDI順位	出生時平均余命	初中等教育の総就学率(%)	一人当たりGDP(購買力平価)
1.アイスランド	1.日本(82.4)	1.オーストラリア(114.2)	1.ルクセンブルグ(77,089)
8.日本	136.ミャンマー(61.2)	41.日本(85.5)	24.日本(31,951)
158.東ティモール	137.東ティモール(60.2)	126.東ティモール(63.2)	171.東ティモール(668)
179.シエラレオネ	179.スワジランド(40.2)	179.ジブチ(25.5)	179.コンゴ民主共和国(281)

【表2】 人間貧困指数(HPI Human Poverty Index)：基本的な人間開発の剥夺(Deprivation)の程度、短命、初等教育の欠如、低い生活水準、社会的排除について測定した指数。HPI-1は開発途上国を対象にしたもの。UNDPホームページより

人間貧困指数指標(HPI-1) 2006	40歳未満で死亡する確率(%)	成人非識字率(%)	安全な水資源を利用できない人口の割合(%)	5歳未満の低体重児の割合(%)
1.チェコ(1.7)	1.シンガポール(1.8)	1.キューバ(0.2)	1.ボスニア・ヘルツェゴビナ(1)	1.クロアチア(1)
122.東ティモール(41.0)	92.東ティモール(21.2)	114.東ティモール(49.9)	98.東ティモール(38)	133.東ティモール(46)
135.アフガニスタン(60.2)	135.ジンバブエ(57.4)	127.マリ(77.1)	123.アフガニスタン(78)	135.バングラデシュ(48)

東ティモールの教育事情

政府の混乱、貧困状況によって、教育現場も大きな影響を受けました。人間貧困指数にもみられるように、成人非識字率は、49.9%、成人の半数が字を読むことができません。ポルトガル統治時代には東ティモール人への教育への投資は不十分なものでした。レファレンダム直後の騒乱の中で、東ティモールでは6-7割の建物が破壊されましたが、教育施設も同様です。国家の再建後も建物の未整備や、教育制度の不在が原因で、空白の学校が多く存在しています。

東ティモールでは学校の再建と教育制度の確立が大きな問題ではありますが、教員の不在という問題が立ちはだかっています。比較的若い国であること、インドネシアによる侵略、占領時代に教育制度が導入されなかったために、教員の人材は圧倒的に不足しているのが現状です。

さらに、2006年の騒乱によって国内で多くの避難民を生み出したことも、教育制度の混乱を招きました。平均出生率が7.8人(世界保健機構2006年データ)という高さは、子どもの割合の多さと、急激な人口増加を生み出し、その結果、学校の受け入れ態勢を圧迫しています。

国連児童基金(ユニセフ)では、東ティモールの教育をめぐる事情について、いくつか課題を提起しています。東ティモールの教育ではまず就学率の低さ(69%)と小学校への入学率の低さが指摘されます。

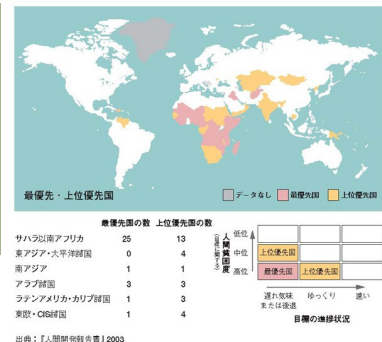
子どもたちが学校に通えない原因はいくつか考えられます。

家庭や地域における金銭面での貧しさや、教育の重要性への理解不足が、子どもを家事手伝いや賃金労働に従事させる場合があります。経済的な貧しさに苦しむ者の多くが、十分に教育を受けることができていないことは、国連も報告しています。

多くの子どもにとって、通学にかかる時間や学校に通うまでの間の道路の未整備状況や治安の不安、学校の設備や教員の能力の不足、その国の政府の計画・管理能力が十分ではないために、生徒の学習達成度が低く、途中でドロップアウトすることもあります。東ティモールでは、山間部で子どもが学校に通うのに歩いて1時間以上かかったり、道路の舗装が悪く、平均して通学に歩いて1時間半かかることから、親が子どもを学校に通わせるがらない傾向にあります。体力的に子どもが学校に通えるようになる頃には、同じクラスの子とも年齢が異なるために、学校に通うことをためらう子どももいます。こうした状況は、通学を妨げているのが現状で

と明らかでしょう。基本的な生活水準を維持するのが困難な東ティモールの現状が見てとれます。また、貧困の解決のための具体的な数値を設定した国連ミレニアム開発目標(MDGs)上も、東ティモールはMDGs達成の期限である2015年に目標の数値を達成することは困難と考えられており、優先的に支援が必要な国のひとつとされています。**【表2】**

図4-1 MDGs達成にむけて一特に支援が必要な国々



す。

また、授業について行けず留年を繰り返す子どもが16%に上るほか、4人にひとりが、学校を途中でやめてしまいます。実際、東ティモールの小学校を訪問してしばしば目にしたのが、上の学年に行けば行くほど、登録されている子どもの数が劇的に減少していました。写真は各学年の生徒数を意味しますが、1年生から2年生にあがる時点で、極端に人数が減っていることがわかります。

さらに、単に就学率という、教育に参加する「数」を向上させたとしても、受けることができる教育の「質」の向上につながる訳ではありません。就学率の低さや教員の質の問題にも関係しますが、学習達成度が低く、小学校を最後まで通うことができる子どもが少ないことも問題です。

教員の能力不足や勤務態度によって十分な教育を受けることができなかったり、少数エスニック集団に所属するため、授業で使用される公用語が分らず、結果として授業についていくことができない場合もあります。東ティモールでは、教育のインフラが整っていないため、二人に一人の教員が、教員資格がないまま子どもを教えています。植民地の名残でポルトガル語とテトゥン語が公用語として使用されていますが、子どもたちが普段使わないポルトガル語での授業のために、授業についていけなかったり、また教員自身が教えることができない場合もあります。さらに、教材があったとしても適切に使われない場合もあります。訪問した小学校の中には、政府から一括して配布された教科書が使われず、建物の端に山積みになっていた。

学校の校舎の数が増えることで、多くの子どもが学校に通えるようになることは、教員一人当たりが受け持つ生徒数の増加を意味します。子ども一人ひとりのケアを十分に行うことができなくなった結果、授業の内容についていくことができず、ドロップアウトする子どもも東ティモールでは多くみられます。



子どもにやさしい学校訪問

東ティモールのユニセフ事務所は、東ティモールの教育を取り巻く現状を踏まえて、「子どもにやさしい学校」というコンセプトで教育問題の解決を目指しています。特に教員の育成とPTAに教育への理解と協力を呼びかけること、そして学校の評価を行う試みに力を入れています。教員の半数が教員資格を取っていなかったり、十分な教育スキルを有していない状況では、子どもに適切な授業を行うことはできません。また、学校の適切な運営を各校で実施することで、子どもが通いやすい環境を整えたり、PTAに教育問題を紹介するキットの作成と配布を行っています。

今回の視察にあたり、ユニセフが「子どもにやさしい学校」を進めている（または進める予定である）4つの小学校を訪問しました。首都ディリから険しい山を越えて4時間ほど行ったところにある山間の小学校です。小学校では、子どもたちが歓迎の歌と踊りで迎えてくれました。

今回訪れた小学校の中で一番印象に残ったのは、ラクルバルという町にあるオルラン小学校（Orlan Primary School）です。この学校は「子どもにやさしい学校」事業の中でも、中心の学校として、周囲の学校の教員の研修なども行っています。生徒数は約280人、7人の先生によって子どもたちを教えています。



オルラン小学校が魅力的だったのは、何といても校長先生の人柄です。ニコラウ・ロバート先生は学校運営やPTAの組織化、魅力的な授業作りに教員たちと一緒に取り組んでいました。学校のあちこちで見られたゴミ箱や手作りのモップ、道路の植樹は、PTAメンバーによって行われたものです。

子どもにやさしい学校とは

Child AFRICAの設立の背景には、ユニセフが提唱する「子どもにやさしい学校」概念への賛同があります。MDGsでは、すべての子どもが小学校に通えることを、2番目の目標として挙げています。子どもが学校に通えるようになるためには、学校の設備を単に整えるだけではなく、現地政府による教育政策の充実やPTAや家族、教会などコミュニティを構成するメンバーも巻き込んで、子どもたちが楽しく通い、そして学習の成果が出る学校作りが必要です。

子どもにやさしい学校は、子どもの権利条約（1989年）に関連して、以下の二つを柱としています。

1. 子どもを捜し求める学校（child-seeking schools）であること

これまで学校に通うことがなかったり、ドロップアウトしてしまった、またドロップアウトする恐れが高い子どもを積極的に見出し、就学させ、学習に参加させること。

2. 子どもを中心とした学校（child-centered schools）であること

子どもの権利条約にある「子どもの最善の利益」（第3条）を優先する中で、生存・発達・参加・保護に関連した権利が不可分であること。学校の運営でも、子どもを中心に考えることが必要となります。

子どもにやさしい学校のもつ、重要な5つの側面は以下の通りです。

(1) すべての子どもを排除せず、多様な子どもも包含する「非差別」であること

学校から離れてしまった子どもたちが再び就学できる支援も必要です。教員の質の向上を通じて、授業についてこれなくなった子どもがケアできるようにしたり、コミュニティや家族とも協力して学校運営に当たることが求められます。

(2) 学習のために効果的であり、きちんと成果を出せること

学校に継続して子どもが通えるようにするには、計画に基づいて質の高い教材や学習プログラムの提供が欠かせません。また、それらを使って子どもを教える教員や学校長自身の「質」の向上も求められます。

(3) 健康的で保護的であること。適切な飲料水やトイレ、手洗いがあること

学校に子どもたちが継続して通うようになるためには、学校の設備の充実も必要です。特に、水回りやトイレ、治安の確保は不可欠です。

さらに、学校に通う子どもの健康も配慮する必要があります。アフリカでは、6人に一人にあたる、毎年1000万人近くの子どものが、5歳未満で死亡していますが、東ティモールでも5歳になる前に死亡する子どもは、1000人中55名、世界でも高い数値となっています（最も高いのはシエラレオネで

1000人中270人、日本は4人です）。子どもが死亡する原因の多くは不衛生な環境から発生する下痢やマラリア、生前発育不全や出生時低体重、その後の発育障害リスクです。子どもたちが健康な身体を保てない環境は、彼らの就学の機会を奪っていることになります。

これらの問題に対し、学校では「食事の前に手を洗う」「トイレを使う」「汚れた水は飲まない」など衛生教育をすることで、子どもの健康を守る必要があります。さらに、栄養が不十分な子どものために、学校で給食を提供することで、子どもが適切な栄養を摂取できるようにします。

また、東ティモールの学校では、教員が生徒に暴力をふるう場合があります。少女の場合は、思春期に教員から性的嫌がらせを受ける危険もあります。こうした状況に対し、教員の指導を通じて、子どもが安心して、学校に通えるような制度作りを行います。

(4) ジェンダーに配慮していること

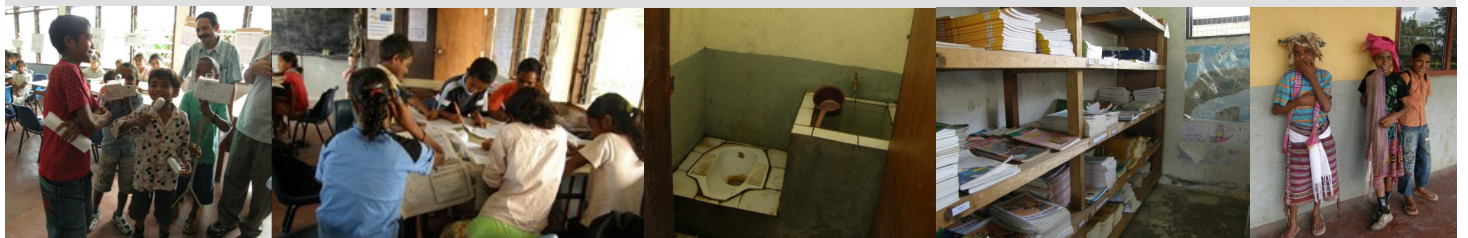
東ティモールに限った話ではありませんが、女性の教育の重要性が認められなかったり、家族の手伝いをするために、学校に来られなかったりと、女兒の就学状況は男児のそれより相対的に低い傾向にあります。また、学校に来たとしても、男女別のトイレが設置されていなかったり、教員の女児へのセクシャル・ハラスメントなど、学校に通いにくい場合もあります。子どもにやさしい学校では、男子生徒と女子生徒が差別なく就学できたり、学習できる環境を推進するほか、少女に設備の設置や学習プログラム、教科書の作成、学習指導の推進が求められます。

(5) 子ども・家族・コミュニティが参加し、協力すること

子どもの学習は、子ども一人でするものではありません。また学校の運営も学校長や教員だけでできるものでもありません。家族やコミュニティの理解や協力が不可欠で、子ども自身の意見を反映させて子どもが通いやすい環境づくりを目指す必要があります。

子どもが積極的に学校に通い、参加するために、学校のクラブ活動、委員会など子ども自身が積極的に学校生活に参加できる態勢を整える必要があります。また両親もPTA活動に参加し、学校運営に携わることで、家族の理解を得ることも容易となります。さらに、家族自身が子どもの学習の達成をサポートできる状況作りが不可欠です。さらに、学校をとりまく教会や保健センターなど、コミュニティの協力も求められます。

「子どもにやさしい学校」のコンセプトは、学校を単なる学びの場としてではなく、子どものあらゆるニーズに対応し、総合的な発達を促す場所とすることを目指し、教材やスポーツ道具の提供から、カリキュラム開発、先生の研修、保健、水やトイレの設備、保護者会や教育の啓蒙活動を含めた総合的な支援活動を指しています。



東ティモールのコーヒー農園 レテフォホ村の取り組み

さて、今回学校訪問以外に楽しみにしていたものに、東ティモールのコーヒー農園の視察があります。Child AFRICAのオンラインショップで販売している「East Timor Coffee」の生産地を視察に行くことは、今回の東ティモールの視察が決定した時点で、私が一番に希望したことでもありました。

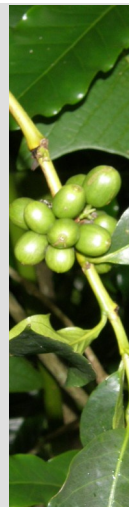
東ティモールのコーヒーは、ポルトガルによる植民地時代にもたらされた産業ですが、現在おいしいコーヒーとして徐々に知られるようになっていきます。

東ティモールがあるティモール島は、熱帯に位置しますが、中央部に涼しい気候であり、コーヒー栽培に適している高い山地が存在しています。インドネシアの占領時代には、インドネシア政府がコーヒーの輸出産業の振興を積極的に行わなかったことから、近代農法の導入がされずに、結果的に昔ながらの農薬や化学肥料を一切使わないコーヒーがとれることができます。また、東ティモールのコーヒーは、背の高い木の間にコーヒーの木を植える、「シェード・グロウン」と呼ばれる栽培方法が行われています。コーヒーの木は日陰を好むことから、背の高い木（これをシェード・

ツリーと呼びます）の下にある木陰で栽培され、強い直射日光からコーヒーが守られています。

東ティモールのコーヒーのもう一つの特徴に、世界で広く栽培されている「アラビカ種」の原種に近いといわれる、ティピカ種であることが挙げられます。このティピカ種は、甘味と清涼感のある、コーヒーですが、病害に弱いので生産性は高くないという問題もあります。

こうした豊かな特色を持つ東ティモールのコーヒーですが、生産者である農民は、栽培方法や品質管理の点からも、昔からの農作業を行っていることから、技術的な知識は不足していました。知識がないために、コーヒーの木は古く、農園の手入れも十分ではありません。また、栽培に必要な剪定作業も行われていないために、コーヒーの収穫量も十分ではありませんでした。さらに、精製工程での不十分な管理体制から、消費者が好むコーヒーを生産してより好条件で輸出し対価を得るには至っていませんでした。



NGO「ピースウィンズ・ジャパン(PWJ)」によるコーヒー栽培・販売プロジェクト

こうしたコーヒーの現状に対し、日本のNGO「ピースウィンズ・ジャパン(PWJ)」がコーヒーの栽培を指導し、フェアトレード商品として日本で販売するプロジェクトを展開しています。

1999年の独立をめぐる住民投票の結果をきっかけに国内では大きな混乱が起きました。混乱の收拾を図るために多国籍軍が介入する中で、世界各地のNGOも支援に乗り出しました。アフガニスタンやイラク、リベリアでの緊急救援活動で実績を持つ日本のPWJも東ティモールに入り、食料や物資の配給、医療支援、住居の修復など緊急支援を実施しました。

その後、より長期的に東ティモールの人々の生活を安定させ、向上させるために、PWJでは、2003年からこの国の輸出産品であるコーヒーの栽培と生産事業の支援を開始し、高品質のコーヒーをフェアトレードで日本に輸入することにより、農民たちの経済的な自立と支援活動のための資金確保を図りました。

2003年からエルメラ県のレテフォホ郡にある村の農民を対象に、日本から技術者を招いて研修を行い、赤く熟した実だけを選別して加工することや、収穫後すぐに果肉を落とすことなどを、きめ細かく指導しました。収穫後のコーヒーの加工は手作業で行われますが、赤く熟した実だけを収穫することで、コーヒーの味の維持に努めています。

赤い実は、果肉を落とした後で、水に漬けて発酵させます。発酵後、豆のぬめりを落とし、最適な水分になるまで天日乾燥させます。こうして乾燥させた豆の内殻を、「パーチメント」と言います。このパーチメントを脱穀して殻を取り除いたものがグリーンビーンズ（生豆）です。これを焙煎すると、私たちが普段目にする黒いコーヒー豆になります。

収穫した赤い豆（レッドチェリー）からパーチメントを経てグリーンビーンズになるまでに、重さは約8分の1に減っています。このことは、100キログラムの収穫でも、グリーンビーンズとして販売できるのは、12キログラム程度であることを意味します。コーヒー栽培は非常に多くの過程を経て、ようやく私たちの食卓に届くのです。

訪問した2月は、コーヒー豆の収穫も終了し、新しい豆が育っていると

ころでした。木を見ると、緑色のコーヒー豆がたくさんついているのが分かります。東ティモールの山間に育つコーヒーの木は、非常に急斜面で育っており、管理は大変です。私はおそるおそる斜面を歩きましたが、東ティモールの人々は、サンダルで自由自在に斜面を歩き、コーヒー豆の収穫を行うのだそうです。また、農園と言っても、特に大規模なプランテーションがある訳ではなく、曖昧な境界線が家庭ごとに設定され、個々の農家が栽培、収穫していました。こうした状況も大規模な収穫を得ることを困難にしていると言えるでしょう。

2004年からは、PWJでは、自給用農産物の収量アップと多様化、生産者組合「カフェ・タタマイラウ」の組織づくりにも取り組んでいます。また日本からコーヒーや農業の専門家を現地に派遣することも行っています。指導を受ける生産者は、2003年には35世帯でしたが、2006年には225世帯にまで拡大しました。収穫・精製されたコーヒー豆の量も7トンから2008年は50トン近くの収穫となったそうです。

カフェ・タタマイラウでもリーダーとなっている農家を訪問しました。農家では、ちょうど自家用のコーヒー作りをしていました。組合では、生産量に応じて各農家にコーヒー豆を支給、販売したり自家用に使うのは自由なのだそうです。PWJの方曰く、「コーヒーの売り上げは一家の女性に渡すようにします。男性に渡すと、飲むか、タバコを吸うか、賭け事に使ってしまうからね」。

しかし、とはいえ、彼らが十分な収入を確保し、PWJの支援なしに自立するには、まだ十分ではありません。その一方で、農家ごとの栽培が実施されることから、大量生産は困難であるという課題があります。

今回訪問の終了後、PWJのレテフォホ事務所でコーヒーをいただきました。透明感があり、飲みやすいコーヒーは、視察で見てきたコーヒーの木や、栽培している人々を思い出させてくれました。そしてこれまで購入してきたフェアトレードコーヒーを栽培する人々の顔を見ることができたこと、彼らを支援する日本の人々の努力など、改めて感じることができました。



東ティモール訪問を終えて



今回の東ティモールを訪問して、感じたことは、まずは厳しい自然環境と歴史的経緯です。Child AFRICAがこれまで見てきたアフリカとはまた異なる、厳しい生活状況がそこにはあります。今なお、政情は安定しているとは言い難い状況です。

また、歴史を紐解くと、東ティモールは、かつて、日本軍が進駐し、支配してきた事実があります。一方、東ティモールには現在複数の日本のNGOをはじめ、多くの支援が行われています。現在の活発な日本からの支援は、こうした歴史的経緯を踏まえると、非常に感慨深いものがありました。

そしてこの新しい国は、現在国づくりが急ピッチで進められています。国づくりに必要なのは人材であり、人材育成に不可欠なのは教育です。そして教育を必要としている人は、まさに東ティモールで育ってきた、子どもたちです。

しかしながら、若い国ゆえに、教育設備といったハード面や、教員の質や授業の内容というソフトの面ではまだまだ課題は多く残ります。教員の多くが、「教える」十分なスキルを持っている訳ではありません。ユニセフでは、「子どもにやさしい学校」を通じて、教員の研修や授業カリキュラムの改善、学校の重要性の理解の促進など、さまざまな試みをしていました。今回の訪問で、Child AFRICAの設立にあたり、非常に重要な概念と私たちが考えた、「子どもにやさしい学校」の現場を見ることで、その大切さ、現場で必要とされている教育支援

とは何か、改めて考えることができました。

また、PWJの事業地訪問を通じて、学校での学ぶ内容にとどまらず、彼らが立ち上がり、生活し、より向上していくために必要な経済活動をどのように支援するのか、という試みを見ることができました。この試みでも、大切なことは、生産者が学び、より良い生産スキルを身につけることです。ここでも「学ぶ」重要性が説かれていました。

Child AFRICAでは、この「学ぶ」ことを大切に考え、そのプロセスを支援したいと考えています。

2008年度は、Child-Friendly Projectを通じて、ユニセフの「子どもにやさしい学校」作りを、そして「East Timor Coffee」のオンライン販売を通じて、レテフォホの農家の人の支援を行いたいと考えています。

※コーヒー販売は終了しました。

